

岡田古墳群  
稲荷宮遺跡

主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内  
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成17年3月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団



## 序

茨城県は、保険・医療・福祉サービスや世代間交流などの機能を備えたまちづくりのモデルとして、茨城町において、やさしさのまち『桜の郷』整備事業を推進しています。その一環として、一般国道6号から桜の郷へのアクセス道路建設として主要地方道内原塩崎線道路改良事業が計画されました。その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である岡田古墳群及び稲荷宮遺跡をはじめ多くの遺跡が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財の発掘事業についての委託を受け、平成16年2月から同年3月まで発掘調査を実施しました。

本書は、岡田古墳群及び稲荷宮遺跡の調査成果を取録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 齋藤佳郎



## 例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大戸2184番地の2ほかに所在する岡田古墳群（岡田古墳群）と同町大字2199番地の2ほかに所在する稲荷宮遺跡（稲荷宮遺跡）の発掘調査報告書である。
- 2 両遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。  
調 査 平成16年2月1日～平成16年3月31日  
整 理 平成17年2月1日～平成17年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼第3班長 村上和彦  
主任調査員 綿引英樹  
調査員 鹿島直樹
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員綿引英樹が担当した。

## 凡 例

- 1 岡田古墳群及び稲荷宮遺跡の地区設定は、それぞれ日本平面直角座標第Ⅳ系座標（世界測地系）に準拠した。

岡田古墳群はX軸 = +35,320m, Y = +52,000mの交点、稲荷宮遺跡はX軸 = +35,400m, Y = +51,880mの交点をそれぞれ基準点（A 1a1）とした。2遺跡それぞれの基準点を基に、遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c・・・j、西から東へ1、2、3・・・0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

- 2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 U P - 地下式坑 S D - 溝跡 S K - 土坑 S F - 道路跡  
遺物 P - 土器 D P - 土製品 Q - 石器・石製品 M - 金属製品 T P - 拓本土器  
土層 K - 攪乱

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 繊維土器断面  
● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は60分の1に縮尺して掲載した。  
(2) 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。

- 6 「主軸」は、長軸（径）を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

- 7 遺物観察表における土器の計測値の単位はcmである。なお、現存値は〔 〕で、推定値は[ ]を付して示した。備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

## 抄 録

ふりがな	おかだこふんぐん とうかみやいせき							
書名	岡田古墳群 稲荷宮遺跡							
副書名	主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第238集							
著者名	編引 英樹							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行日	2005(平成17)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	経度	標高	調査期間	調査面積	調査原因
岡田古墳群	茨城県東茨城郡 茨城町大戸2184番 地の2ほか	08302 - 223	36度 18分 58秒	140度 24分 47秒	15 ~ 17m	20040201 ~ 20040331	1.436㎡	主要地方道内 原塩崎線道路 改良工事に伴
稲荷宮遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大戸2199番 地の2ほか	08302 - 094	36度 18分 59秒	140度 24分 42秒	17 ~ 20m	20040201 ~ 20040331	1.942㎡	う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岡田古墳群	生活跡	中世	地下式坑	4基	縄文土器片 土製品(五徳) 大甕(常滑) 陶器(播鉢)		第2号溝跡と第4号溝跡から常滑の大甕が出土しており、接合関係にあった。	
	その他	時期不明	溝跡	10条	縄文土器片、弥生土器片、土師器片(坏)、須恵器片(坏・蓋)、土師質土器片(内耳鍋)、陶器片(壺)			
稲荷宮遺跡	生活跡	中世	地下式坑	1基			溝跡が2条確認され、土師器の坏や小形甕が出土している。	
	その他	時期不明	溝跡	2条	土師器片(坏・小形甕)、須恵器片(坏・高台付坏)、陶器片(壺)、土製品(支脚)			

# 目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 岡田古墳群	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 中世の遺構と遺物	8
(1) 地下式坑	8
(2) 溝跡	13
2 その他の遺構と遺物	17
(1) 道路跡	17
(2) 溝跡	18
(3) 土坑	24
(4) 遺構外出土遺物	24
第4節 まとめ	27
第4章 稲荷宮遺跡	29
第1節 遺跡の概要	29
第2節 基本層序	29
第3節 遺構と遺物	30
1 中世の遺構	30
地下式坑	30
2 その他の遺構と遺物	30
(1) 溝跡	31
(2) 土坑	35
(3) 遺構外出土遺物	35
第4節 まとめ	37



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東茨城郡茨城町前田地区において、一般国道6号から「桜の郷」へのアクセス道路として、主要地方道内原塩崎線の道路改良事業を進めている。

平成8年9月17日、茨城県水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年10月10日に現地踏査、平成12年11月27～29日に試掘調査を実施し、岡田古墳群及び稲荷宮遺跡の所在を確認した。平成13年1月17日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に対して、事業地内に岡田古墳群及び稲荷宮遺跡が所在する旨を回答した。

平成14年9月9日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成14年9月30日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成14年11月9日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道内原塩崎線道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成14年11月28日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に対して、岡田古墳群及び稲荷宮遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

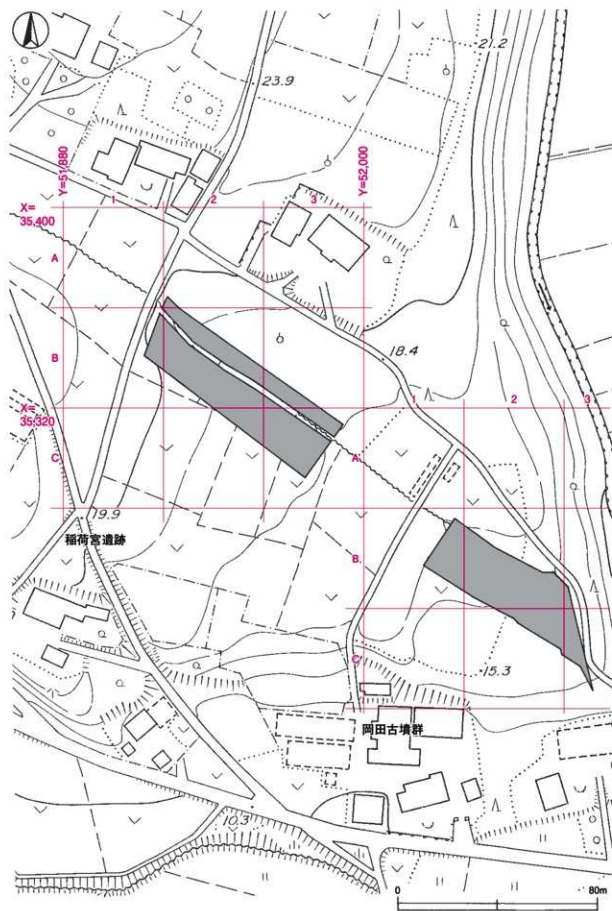
財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年2月1日から同年3月31日まで岡田古墳群及び稲荷宮遺跡の発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

岡田古墳群及び稲荷宮遺跡の調査は、平成16年2月1日から平成16年3月31日まで実施した。

以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	2月	3月
調査準備 表土除 遺構確認		■	
遺構調査		■	■
遺物洗 注写真		■	■
補足調査 撤収			■



第1図 岡田古墳群・稲荷宮遺跡調査区設定図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

岡田古墳群は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸2184番地の2ほか、稲荷宮遺跡は、同町大字大戸2199番地の2ほかそれぞれ所在している。

茨城町は、町のほぼ中央部を東流する酒沼川の氾濫原とその東に展開する酒沼の低湿地によって、台地が南北に二分されている。台地の北部は標高25～30mの東茨城台地の先端部にあたり、北西から流れる酒沼前川を含む多くの支谷が酒沼方向に開口している。南部に発達している台地は、大谷川、寛政川が酒沼に流入し、その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入しており、北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地形を呈している。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常総粘土層、関東ローム層の順に重なっており、これらの地層はいずれもほぼ水平堆積である。

岡田古墳群・稲荷宮遺跡は茨城町西北部の大戸地区にあり、酒沼前川とその支流である小橋川に開析された支谷に挟まれて舌状に張り出した台地縁辺部の段丘上に位置している。現在は用水として利用されているが、両遺跡を貫くようにして浅く小さな支谷が南南東側に走っており、それに伴い標高も徐々に下がっている。岡田古墳群は、標高約15～17mの中位段丘上に、稲荷宮遺跡は、岡田古墳群同様、酒沼前川左岸の標高17～20m前後の中位段丘上にそれぞれ位置している。調査前の現況はそれぞれ畑地である。

### 第2節 歴史的環境

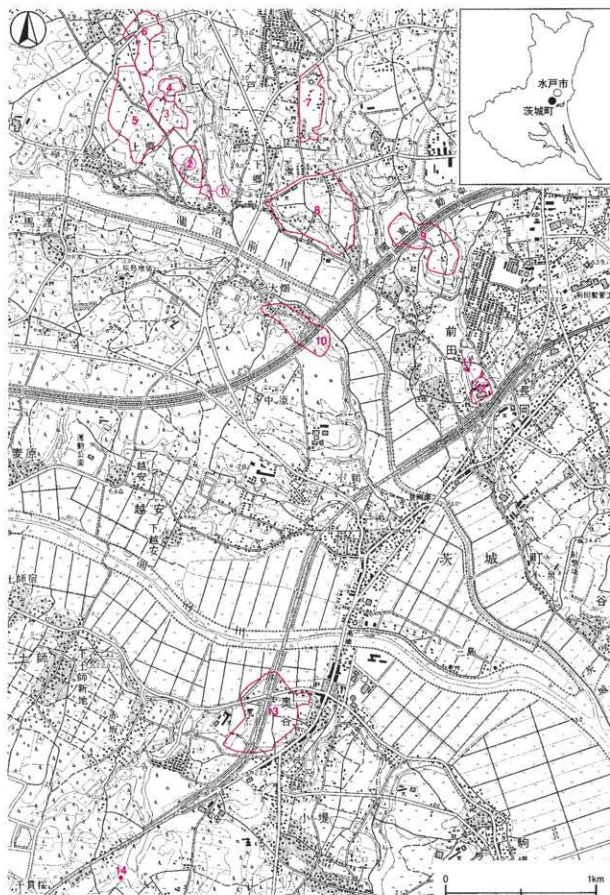
茨城町周辺には、縄文時代から中世・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、酒沼を中心に中小河川を利用した水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の場所であった。ここでは、岡田古墳群及び稲荷宮遺跡に関連する主な遺跡について時代を追って述べることにする。

#### 1 縄文時代

当遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、宮後遺跡<sup>6)</sup>、大戸神宮寺遺跡<sup>7)</sup>、大戸下郷遺跡<sup>8)</sup>、矢倉遺跡<sup>9)</sup>、大畑遺跡<sup>10)</sup>などが周知されている。平成10～12年度に調査された宮後遺跡<sup>11)</sup>では、200基を超える土坑墓が放射状に配列されているのが確認された。また、それら土坑墓群の1基からは、長さ11.1cm、重さ200.0gの翡翠の大珠が出土している。

#### 2 弥生時代

この時代の遺跡としては、石原遺跡<sup>3)</sup>、綱山遺跡<sup>4)</sup>、大塚遺跡<sup>5)</sup>、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、長岡遺跡<sup>12)</sup>など遺跡数が多い。この時代に酒沼川を中心とする小文化圏があったことが想定される。また、矢倉遺跡<sup>9)</sup>や大戸下郷遺跡<sup>8)</sup>では群馬県を中心に分布する櫛式土器や栃木県を中心に分布する二軒屋式土器、本県南部に分布する上稲吉式土器が出土していることから、他地域との交流も指摘されている。



第2図 岡田古墳群・稲荷宮遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院「小鶴」) 1 : 25,000

表1 岡田古墳群・稲荷宮遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代							
		旧石	縄文	弥生	古墳	奈良			中世	近世	旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中世
①	岡田古墳群		○	○	○	○	○	8	大戸下郷遺跡		○	○	○	○	○	○
②	稲荷宮遺跡			○	○	○	○	9	矢倉遺跡		○	○	○	○	○	○
3	石原遺跡		○	○	○	○	○	10	大畑遺跡	○	○	○	○	○	○	○
4	綱山遺跡		○	○	○	○	○	11	上ノ山古墳				○			
5	大塚遺跡		○	○	○	○	○	12	長岡遺跡			○	○			
6	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	13	奥谷遺跡		○	○	○	○	○	○
7	大戸神宮寺遺跡		○		○	○		14	小幡北山墳輪製作遺跡				○			

## 3 古墳時代

この時代の遺跡は、当遺跡周辺でも石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡、大戸神宮寺遺跡、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、上ノ山古墳(11)など、数多く確認されている。大戸下郷遺跡<sup>1)</sup>では、弥生時代後期後半の土器と古墳時代前期の土器が共存する住居内の墓塚からガラス小玉31点、琥珀玉1点が出土している。また、茨城町で唯一の前方後円墳である上ノ山古墳<sup>2)</sup>からは、南へ4kmほどに位置する小幡北山墳輪製作遺跡<sup>3)</sup>(14)で製作されたと思われる埴輪が出土している。

## 4 奈良時代・平安時代

律令制下の当地方は、那賀郡八都郡、茨城郡烏田郷・白川郷・安侯郷、鹿島郡宮前郷に属していた<sup>4)</sup>。この時代の遺跡は町内全域で確認されており、石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡、大戸神宮寺遺跡、大戸下郷遺跡、矢倉遺跡、大畑遺跡、奥谷遺跡(13)など、100遺跡を数える<sup>5)</sup>ことができる。奥谷遺跡<sup>6)</sup>では、百数十点の墨書土器のほか、円面硯や刀子が出土しており、特に、墨書の「曹司」は、官衙などの庁舎の意味があり、奥谷遺跡が官衙的な公共施設を含む集落であったことを示している。また、大塚遺跡<sup>7)</sup>や宮後遺跡<sup>8)</sup>では、墨書土器や円面硯がそれぞれ出土している。宮後遺跡に隣接する大塚遺跡<sup>9)</sup>からは「コ」の字状に並ぶ掘立柱建物跡が確認され、墨書土器や円面硯・灰軸陶器なども出土している。さらに、綱山遺跡<sup>10)</sup>でも掘立柱建物跡が確認され、墨書土器・円面硯・灰軸陶器が出土している。

## 5 中世・近世

中世の遺跡は主に城館跡である。小幡城跡、宮ヶ崎城跡、海老沢館跡、奥谷館跡、飯沼城跡などが所在している。小幡城跡は現存する町内の城館跡の中では最大規模で、初期の城主については小田一族や大塚一族などの説があるが、詳細については不明である。また、奥谷遺跡<sup>11)</sup>からは堀、地下式坑、方形堅穴状遺構、井戸跡などが確認され、土師質土器や陶器が出土している。

近世になると、町の中心部を南北に通ずる水戸街道沿いの長岡・小幡は宿駅として発展し、徳川期には水戸藩主の休憩・宿泊のために御殿が造られていた。近世中期以降になると、水戸街道は五街道に次ぐ脇往還として栄え、最盛期には23藩の大名が参勤交代のつどこの道を通過した<sup>12)</sup>。また、海老沢・綱掛は水上交通の要衝としても河岸を中心に栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩や奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継地として重要な役割を果たすようになった。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図表1の該当遺跡番号とおなじである。

註)

- 1) 川又清明ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 宮後遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 茨城県教育財団 2002年3月
- 2) 飯島一生「北関東自動車道(友部～水戸)建設地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡 後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 茨城県教育財団 1998年3月
- 3) 近藤恒重「主要地方道内原塚崎道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 大戸下郷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 茨城県教育財団 2004年3月
- 4) 註3)に同じ
- 5) 茨城町史編さん委員会「茨城町山ノ上古墳」茨城町 1994年3月
- 6) 大塚初重ほか「小幡北山埴輪製作遺跡」茨城町 1989年2月
- 7) 茨城町史編さん委員会「茨城町史 通史編」茨城町教育委員会 1995年2月
- 8) 註7)に同じ
- 9) 註7)に同じ
- 10) 茨城町大峰遺跡発掘調査会「茨城町大峰遺跡」茨城町 1990年3月
- 11) 川又清明ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 宮後遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 茨城県教育財団 2005年3月
- 12) 長谷川聡ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 大塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 茨城県教育財団 2005年3月
- 13) 荒崎克一郎ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 綱山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 茨城県教育財団 2005年3月
- 14) 熊澤和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財報告書 奥谷遺跡 小幡遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 茨城県教育財団 1989年3月
- 15) 註7)に同じ

#### 参考文献

- ・ 茨城県教育庁文化課「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 2001年3月
- ・ 藤須紀夫「茨城県 地学ガイド」コロナ社 1986年11月

## 第3章 岡田古墳群

### 第1節 遺跡の概要

岡田古墳群は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸2184番地の2ほかに所在し、潤沼前川左岸の標高約15~17mの中位段丘上に位置している。調査面積は1,436㎡で、調査前の現況は畑地である。

今回の調査によって検出された遺構は、中世の地下式坑4基、溝跡2条の他に、時期不明の溝跡10条、道路跡1条、土坑2基である。また、盛土状の高まりについてはトレンチ調査を行い、土層断面から自然地形であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で4箱分が出土した。主な出土遺物は、縄文土器片、弥生土器片、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・高台付盤・蓋・甕)、土師質土器(内耳鍋)、陶器(福鉢・大甕)、土製品(球状土錘・支脚)、石器(剥片、不明石製品)、鉄滓、古銭などである。

### 第2節 基本層序

調査区西側のB1d7区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は17.0mで、地表から約1.8mほど掘り下げ、第3図のような堆積状況を確認した。テストピット付近は、耕作による攪乱を受けている。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層は、ロームブロックを微量含む暗褐色のローム層で、厚さは10~34cmで、粘性・締まりとも普通である。

第2層は、褐色のローム層で、白色粒子を微量含んでいる。厚さは4~18cmで、粘性は普通であるが、締まりがやや弱い。

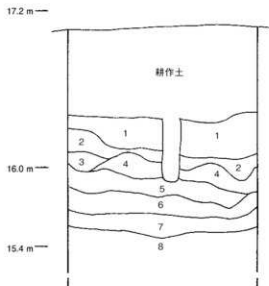
第3層は、褐色のローム層で、極めて微量ではあるが白色粒子を含んでいる。厚さは最大で15cmほどで、粘性・締まりとも普通である。

第4層は、明褐色のローム層で、白色粒子微量を含んでいる。厚さはおおむね19cmで、粘性・締まりとも普通である。

第5層は、にぶい褐色のローム層で、粘土粒子を少量含んでいる。厚さはおおむね20cmで、粘性・締まりとも普通である。

第6層は、にぶい褐色のローム層で、第6層よりも若干暗い。粘土粒子を少量含み、厚さは8~28cmで、粘性は普通であるが、締まりがやや強い。

第7層は、灰褐色の層で、粘土粒子を少量含み、ローム粒子も微量ながら含まれている。厚さは10~28cmで、粘性は普通であるが、締まりがやや強い。



第3図 基本土層図(1)

第8層は、褐灰色の層で、細礫中量の外に、粘土ブロック・粘土粒子を少量含んでいる。層厚は未掘のため確認できなかったが、粘性・締まりとも普通である。

高低差があるが、遺構は2層～8層の間で確認されている。

調査区西側のB 2 d8～B 3 j1区に位置する盛土状の高まりについてA地点・B地点の2か所でトレンチ調査を行い、土層の堆積状況の観察を行った。調査の結果、A・B地点共に同じような堆積状況を示す自然堆積であることが判明したことから、盛土状の高まりは自然地形であると判断した。

以下、土層断面の観察から層序を説明する。

第1層は、黒色粒子・赤色粒子を微量含む明褐色のソフトローム層で、厚さは14～52cmで、粘性は強く、締まりはやや強い。

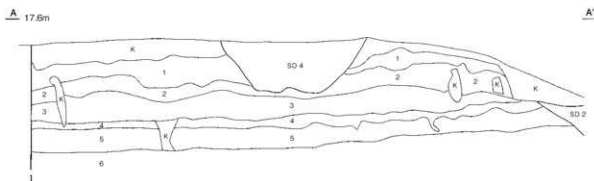
第2層は、黒色粒子・赤色粒子を微量含む明褐色のハードローム層で、褐鉄粒も微量含まれている。厚さは14～40cmで、粘性は強く締まりはかなり強い。

第3層は、2層よりやや暗い明褐色のハードローム層で、黒色粒子・赤色粒子を微量含み、細礫も認められた。厚さは10～50cmで、粘性・締まりとも強い。

第4層は、黒色粒子・赤色粒子を微量含む明褐色のローム層であるが、鹿沼バミスの中量含んでいることから、鹿沼バミス層への漸移層と考えられる。厚さは10～20cmで、粘性は普通であるが、締まりはやや強い。

第5層は、橙色の鹿沼バミス層で、厚さは6～12cmであり、粘性は弱い締まりは強い。

第6層は、黒色粒子を微量含む明褐色のハードローム層で、層厚は未掘のため確認できなかったが、粘性・締まりとも強い。



第4図 Aトレンチ土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 中世の遺構と遺物

地下式坑4基、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 地下式坑



### 第1号地下式坑（第5図）

位置 調査区南東部のB2e6区に位置している。

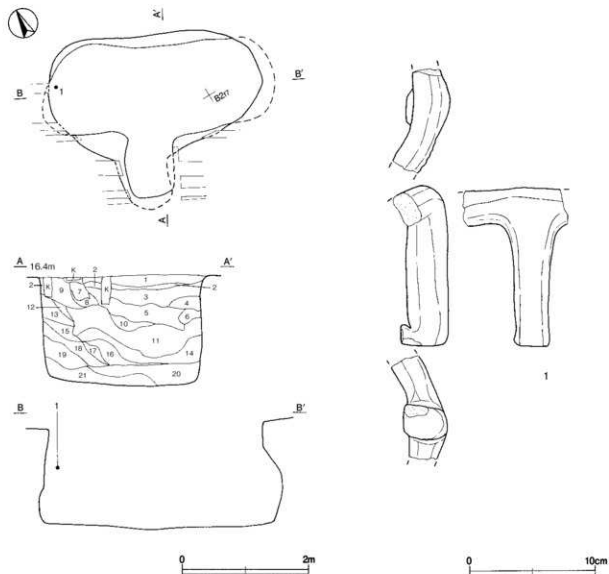
竪坑 一部耕作による擾乱を受けているが、長径1.17m、短径0.73mの楕円形で、深さは1.60mほどである。壁はほぼ直立しており、底面は主室に向かってスロープ状に傾斜している。

主室 平面形は長軸3.42m、短軸1.79mの隅丸長方形で、深さは1.74mである。底面は平坦で、壁がほぼ直立し、横断面はU字状を呈している。天井部は崩落している。

覆土 21層に分層される。鹿沼パミスや鹿沼パミスブロックを含んでいるが、堆積状況から竪坑から主室へ流れ込んだ自然堆積である。7・11層は鹿沼パミスブロックを多量に含んでいることから、崩落した天井部と考えられる。

#### 土層解説

- |        |                     |        |                     |
|--------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 浅黄褐色 | 鹿沼パミス多量             |
| 2 暗褐色  | ローム粒子微量             | 8 褐色   | ローム粒子中量、鹿沼パミス少量     |
| 3 無暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量      | 9 暗褐色  | ローム粒子少量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 4 暗褐色  | ローム粒子・炭化物・鹿沼パミス少量   | 10 褐色  | ローム粒子・鹿沼パミス中量       |
| 5 暗褐色  | ロームブロック・炭化物微量       | 11 褐色  | 鹿沼パミスブロック多量、ローム粒子少量 |
| 6 褐色   | 鹿沼パミス中量、ローム粒子少量     | 12 褐色  | ロームブロック少量           |



第5図 第1号地下式坑・出土遺物実測図

岡田古墳群

13	褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス・細礫微量	18	暗褐色	ロームブロック少量
14	褐色	ローム粒子中量、細礫少量	19	褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック・細礫微量
15	褐色	ローム粒子中量	20	にぶい褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス微量
16	褐色	ローム粒子・細礫・砂粒中量	21	褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミスブロック・細礫微量
17	にぶい褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、鹿沼パミス微量			

遺物出土状況 土師器片6点(兼)、五徳1点が出土している。

所見 遺構に伴う遺物は出土していないが、時期は、遺構の形態から中世と考えられる。性格は不明である。

第1号地下式坑出土遺物観察表(第5図)

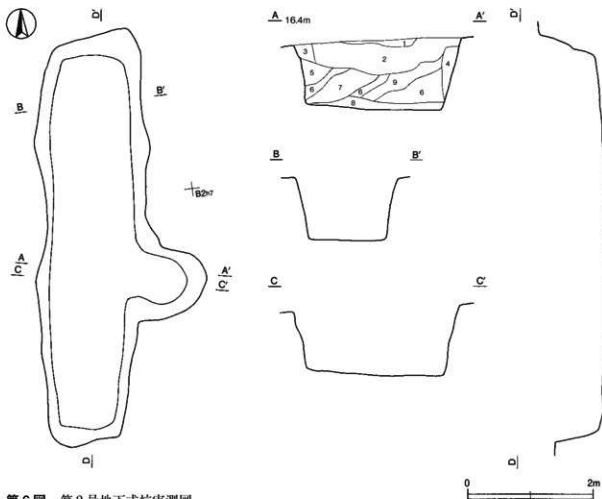
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土製品	五徳	[150]	125	-	白色粒子・黒色粒子・細礫	橙	良好	全面丁寧なナデ	覆土下層	5%

第2号地下式坑(第6図)

位置 調査区南東部のB2g6区に位置している。

竪坑 長径1.20m、短径1.17mの円形で、深さは1.10mである。底面は平坦で、壁はほぼ直立しているが、上部ではやや外傾している。

主室 平面形は長軸6.52m、短軸1.82mの長方形で、深さは1.12mである。底面は平坦で、壁はわずかに外傾して立ち上がっている。横断面はU字状を呈しており、天井部は崩落している。



第6図 第2号地下式坑実測図

覆土 9層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- |         |                      |       |                        |
|---------|----------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色   | ロームブロック・炭化物微量        | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・炭沼バミス微量   |
| 2 褐色    | ローム粒子少量、炭化物・細礫微量     | 7 黄褐色 | 炭沼バミスブロック中量、ローム粒子少量    |
| 3 明褐色   | 炭沼バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色  | ローム粒子少量、炭沼バミス微量        |
| 4 にぶい褐色 | 炭沼バミス少量、ローム粒子・粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | 炭沼バミスブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 橙褐色   | 炭沼バミス中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |       |                        |

遺物出土状況 縄文土器片1点（鉢類）が出土しているが、細片のため図示することはできない。

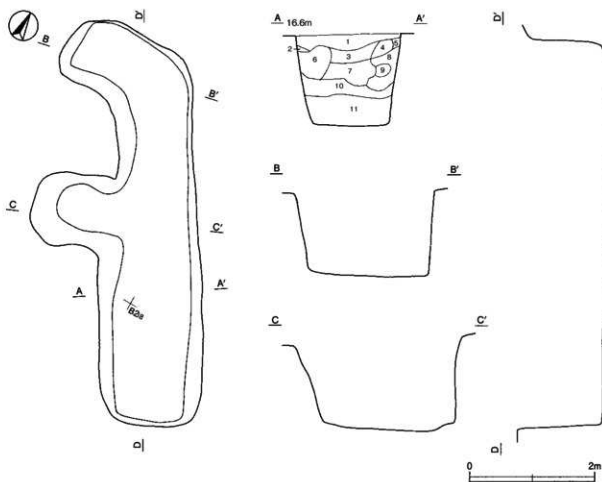
所見 遺構に伴う遺物は出土していないが、時期は遺構の形態から中世と考えられる。性格は不明である。

第3号地下式坑（第7図）

位置 調査区南東部のB2h7区に位置している。

竪坑 長径1.45m、短径1.10mの楕円形で、深さは1.12m前後である。壁はほぼ直立している。底面は主室に向かってスロープ状に緩やかに傾斜している。

主室 平面形は長軸6.49m、短軸1.34m前後の長方形で、深さは1.44mである。主室の左側は40°ほど鉤の手に折れており、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。横断面はU字状を呈しており、天井部は崩落している。



第7図 第3号地下式坑実測図

**覆土** 11層に分層される。崩落のため一部ブロック状の堆積状況を示しているが、自然堆積である。

**土層解説**

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
2 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	8 橙褐色	鹿沼パミスブロック少量、ローム粒子微量
3 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量
4 暗褐色	ロームブロック少量	10 明褐色	鹿沼パミスブロック・ローム粒子微量
5 明褐色	鹿沼パミス少量、ローム粒子微量	11 にぶい褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミスブロック少量
6 褐色	ロームブロック中量		

**所見** 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。性格は不明である。

**第4号地下式坑（第8図）SK7**

**位置** 調査区南東部のB2g5区に位置している。

**竪坑** 長径0.74m、短径0.64mの楕円形で、深さは0.74mである。壁はやや外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かってスロープ状に緩やかに傾斜しており、主室との間に38cm程度の段差がある。

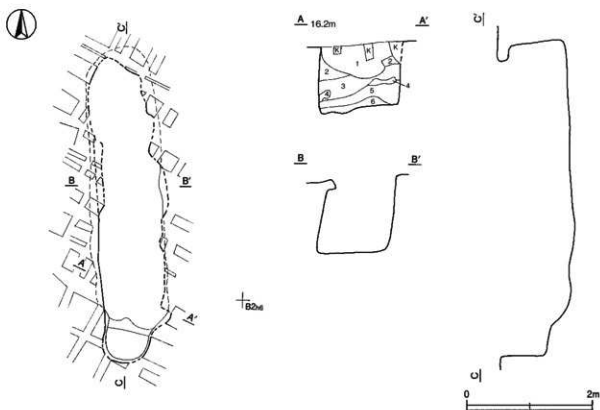
**主室** 平面形は長軸4.70m、短軸1.08m前後の隅丸長方形で、深さは1.19mである。底面は平坦で、奥壁は内傾しているが、その他の壁は外傾して立ち上がっている。横断面はU字状を呈しており、一部天井部が遺存している。

**覆土** 6層に分層される。崩落のため一部ブロック状の堆積状況を示しているが自然堆積である。

**土層解説**

1 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化物微量	4 暗褐色	ローム粒子多量
2 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、細粒微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子中量、細粒微量

**所見** 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。性格は不明である。

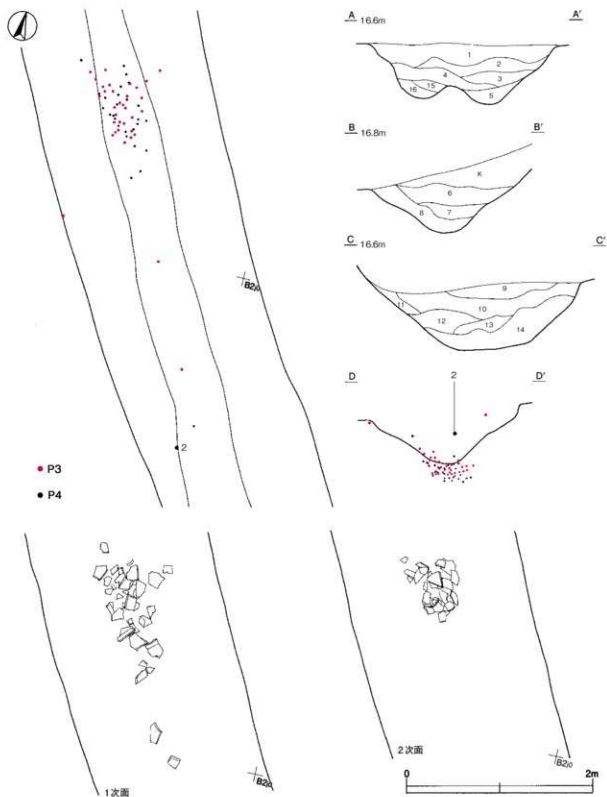


第8図 第4号地下式坑実測図

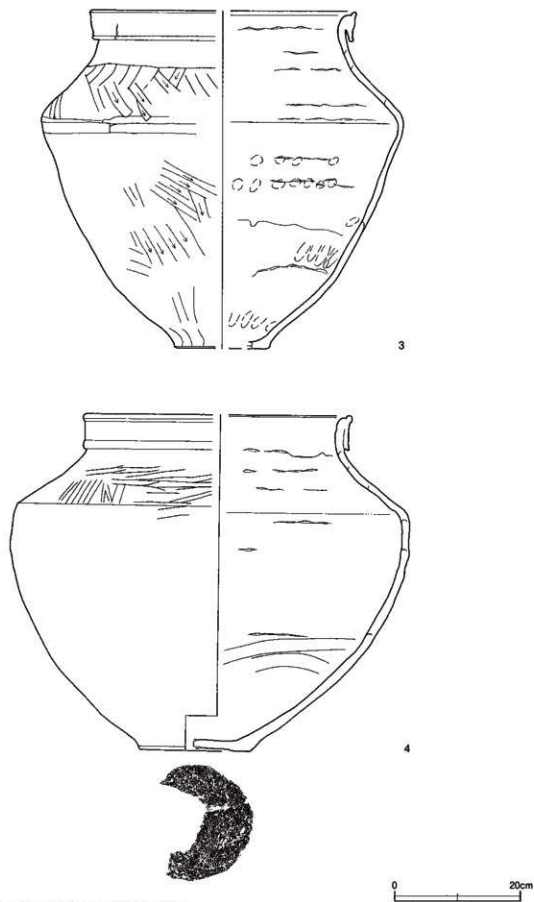
(2) 溝跡

第2号溝跡 (第9～11・33図)

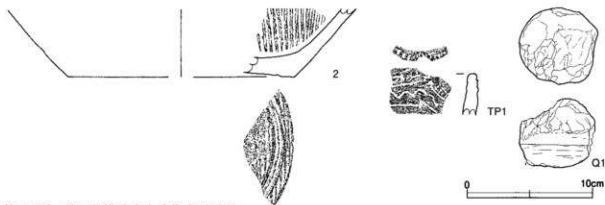
位置 調査区南東側のB 2 e7～C 2 c0区に位置している。



第9図 第2号溝跡実測図



第10図 第2号溝跡出土遺物実測図(1)



第11図 第2号溝跡出土遺物実測図(2)

**重複関係** 第3号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北西及び南東側は調査区域外へ伸びているため全体を確認することはできなかったが、B 2区7区から南東方向(N-144°E)へ直線的に28.0mほど伸び、そこから屈曲して南方向(N-173°E)へ7.50m伸びている。上幅1.76~1.92m、下幅0.32~0.84m、深さ0.41~0.52mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 16層に分解される。ロームブロックや鹿沼パミスブロックを含み、一部ブロック状の堆積状況を示すが、自然堆積である。

**土層解説**

1 暗褐色	ロームブロック少量、細粒微量	10 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・細粒微量
2 褐色	ローム粒子中量、細粒微量	11 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
3 に近い褐色	ロームブロック、鹿沼パミスブロック少量	12 褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス・細粒微量
4 暗褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス微量	13 褐色	ローム粒子少量、炭化物・鹿沼パミス微量
5 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量	14 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック、炭化物・細粒微量
6 褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量	15 に近い褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量
7 褐色	ロームブロック少量	16 に近い褐色	鹿沼パミスブロック・ローム粒子少量
8 暗褐色	ロームブロック・炭化物・鹿沼パミス微量		
9 褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量		

**遺物出土状況** 縄文土器片3点(深鉢)、弥生土器片3点(壺類)、土師器片12点(坏5、甕7)、須恵器片5点(坏2、蓋3)、陶器片40点(播鉢1、常滑産大甕39)、石製品3点(割片2、不明1)、不明鉄製品1点が出土している。2は覆土上層から、3・4の大部分は覆土下層から出土しており、第4号溝跡から出土した破片と接合関係にある。4の底部は焼成後穿孔され、断面が面取りされていることから二次利用されたことがうかがえる。

**所見** 15世紀前半に比定される常滑産の大甕が出土していることから、時期は中世後半と考えられる。性格については不明である。

第2号溝跡出土遺物観察表(第10・11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	陶器	播鉢	-	(4.4)	[9.0]	灰石・砂粒・褐色粒子	赤褐	良好	内面に播目、底部外面に沈線、底面に横線	覆土上層	5% 明石産+
3	陶器	大甕	[42.6]	53.9	[15.0]	長石・石英・礫	橙	普通	粘土層を上層底面、底部下層へナナ字口埋込み、外面種子字、内面輪周に溝、常滑産、粘土層を3層以上、1層厚さ1.5cm程度で、均等に敷き、底面を均等に焼成してある。	覆土下層	40% 常滑産 PL.5
4	陶器	大甕	[42.4]	53.5	18.0	長石・石英・礫	橙	普通		覆土下層	50% 常滑産 PL.5
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にに近い赤褐	良好	口縁部にへら状工具による縞み、深鉢土器の区画内に被り産	覆土中	早期中葉 PL.6

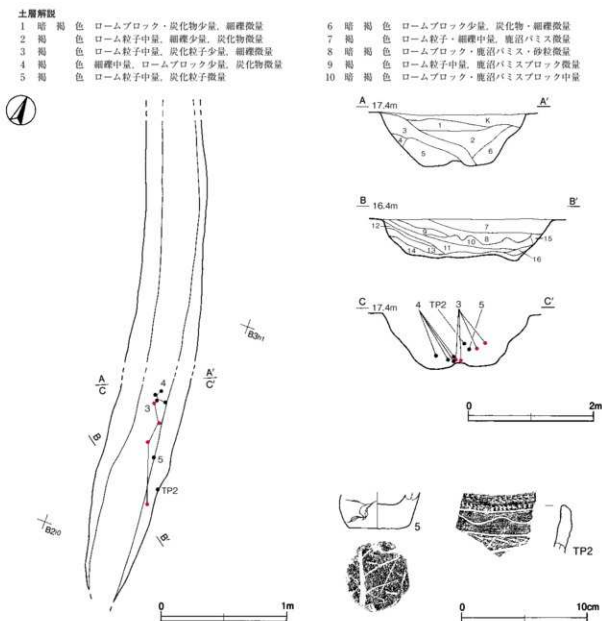
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	不明石製品	61	6.2	(5.8)	(258.0)	流紋岩	下端に工具による崩り痕有り	覆土上層	

### 第4号溝跡 (第12図)

位置 調査区南東側のB 2g0~B 2j0区に位置している。

規模と形状 北側は後世の擾乱を受け、南側は耕作により削平されているため全体を確認することはできなかったが、B 2g0区から南方向(N-173°-E)へ直線的に134m延びている。上幅0.88~2.20m、下幅0.86~1.30m、深さ0.55~0.68mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 16層に分層される。ロームブロックや鹿沼ブロックを含み、一部ブロック状の堆積状況を示すが、自然堆積である。



第12図 第4号溝跡・出土遺物実測図



11	桶 褐色	ロームブロック少量	14	桶 色	ローム粒子中量	鹿沼バミス微量
12	桶 色	ロームブロック中量	15	桶 色	ローム粒子少量	鹿沼バミス微量
13	桶 褐色	ロームブロック少量	16	桶 褐色	ローム粒子少量	鹿沼バミス微量

遺物出土状況 縄文土器片2点（深鉢）、土師器片9点（坏3、甕6）、手捏土器1点、陶器片10点（常滑産大甕）が出土している。5は覆土中層から出土しているが遺構に伴わないものである。また、陶器片の内、第2号溝跡出土の3には底部片を含む4点が、同じく4には口縁部を含む4点が接合関係にある。

所見 第2号溝跡から出土した15世紀前半に比定される常滑産の大甕と接合関係にある破片が出土していることから、時期は中世後半と考えられる。性格については不明である。

#### 第4号溝跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	手捏土器	-	(3.0)	5.0	長石・石英・雲母・ 黒色粘土	にぶい橙	普通	体部外面下端輪積み肌、底面木葉肌	覆土中層	PL.6
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP2	縄文土器	深鉢	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	口縁部目録による押止、胴部文様による 区画内ニ表状流溝、口縁部縦文様	覆土中層	早期中葉 PL.6

表2 地下式坑一覽表

番号	位置	主軸方向	規 模 (m)						壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
			竪 坑			主 室							
			長径×短径	深さ	平面形	長軸×短軸	深さ	平面形					
1	B 2c4	N-26°E	1.17×0.73	1.60	楕円形	3.42×1.79	1.74	隅丸長方形	直立	平坦	自然	土師器・土製品	
2	B 2g6	N-81°W	1.20×1.17	1.10	円形	6.52×1.82	1.12	長方形	直立 外傾	平坦	人為	—	
3	B 2h7	N-66°E	1.45×1.10	1.12	楕円形	6.49×1.34	1.44	長方形	直立 外傾	平坦	自然	—	
4	B 2g5	N-2°W	0.74×0.64	0.74	楕円形	4.70×1.08	1.19	隅丸長方形	外傾	平坦	自然	—	

表3 溝跡一覽表

番号	位置	方向	形状	規 模 (m)				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長	上幅	下幅	深さ					
				2	B 2c7~C 2c0	N-144°E N-173°E	屈曲					
4	B 2g0~B 2j0	N-173°E	直線状	16.5	0.88~2.20	0.86~1.30	0.55×0.68	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器・手捏土器・陶器	

## 2 その他の遺構と遺物

時期及び性格を判断することができなかった道路跡1条、溝跡10条、土坑2基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

### (1) 道路跡

#### 第1号道路跡（第33図）

位置 調査区中央部のB 2c4~B 2f4区に位置している。

**規模と形状** 北側は調査区域外へ延びており、耕作による削平を受けているため全体を確認することはできず、硬化面だけが確認された。B 2 c4区から南方向（N-187°-E）へ直線的に8.46m延びている。確認された硬化面の幅は0.22~0.60mで、全体を通して平坦である。

**覆土** 不明である。

**所見** 遺物が出土していないため、時期は不明である。

(2) 溝跡

**第1号溝跡**（第13・33図）

**位置** 調査区南東側のC 3 b1~C 3 c1区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

**重複関係** 第3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北側は後世の擾乱を受け、南側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、C 3 b1区から南方向（N-152°-E）へ直線的に延びている。確認された長さは6.45mで、上幅0.88~1.62m、下幅0.58~1.34m、深さ0.70mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

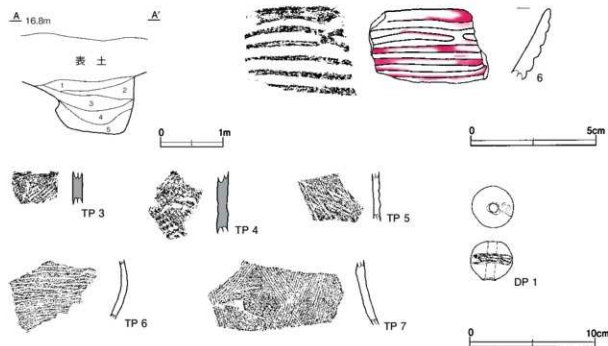
**覆土** 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

**土層解説**

- |       |                     |       |                   |
|-------|---------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量        | 4 明褐色 | 炭沼バミスブロック・ローム粒子微量 |
| 2 褐色  | ロームブロック微量           | 5 褐色  | 炭沼バミスブロック・ローム粒子微量 |
| 3 橙褐色 | 炭沼バミスブロック少量、ローム粒子微量 |       |                   |

**遺物出土状況** 縄文土器片8点（鉢類）、弥生土器片9点（鉢類1、壺類8）、土師器片2点（坏、甕）、土製品1点（球状土錘）が出土している。

**所見** 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第13図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
6	弥生土器	鉢	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母・黒色微粒子	にぶい黄緑	普通	口縁部外面に深い沈線で変形工文字	覆土中	写真・図録 弥生前期土 PL6
TP3	縄文土器	深鉢	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母・黒色微粒子	明褐色	普通	単節縄文施文	覆土中	前期前葉
TP4	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母・黒色微粒子	にぶい褐色	普通	単節縄文施文	覆土中	前期前葉
TP5	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母・黒色微粒子	にぶい黄緑	普通	櫛目状文施文	覆土中	中期未葉 PL6
TP6	弥生土器	壺	-	(4.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	附加条二種(附加1条)による縄文施文	覆土中	
TP7	弥生土器	壺	-	(5.1)	-	長石・石英・雲母	黄褐色	良好	11本一単位の櫛面状工具による櫛目文	覆土中	PL6

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D P 1	埴土土鉢	3.3	0.7	3.1	32.3	埴土(長石・黒色微粒子)	ナデ、片面穿孔	覆土中	

### 第3号溝跡 (第14・33図)

位置 調査区南東側のC 2 a0～C 3 c1区で、南東へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

重複関係 第1号溝跡を掘り込み、第2号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 南東側は調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、C 3 b1区から南東方向(N-44°-E)へ直線的に延びている。確認された長さは7.20mほど

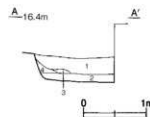
で、上幅1.40～1.70m、下幅0.41～0.91m、深さ0.36mである。底面は平坦で、

壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス微量
- 3 にぶい褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・鹿沼バミス微量
- 4 橙褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量



第14図 第3号溝跡実測図

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。

### 第5号溝跡 (第15・33図)

位置 調査区南東側のB 2 j6～B 2 j8区に位置している。

重複関係 第6号溝跡に掘り込まれている。

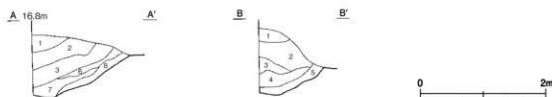
規模と形状 B 2 j6区から東方向(N-102°-E)へ直線的に延びている。確認された長さは9.32mで、南側半分は調査区域外であるため全体を確認することはできず、上幅、下幅共に不明である。深さは0.92～1.08mで、確認できた壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦と考えられる。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

#### 土層解説

- |        |                     |   |     |                            |
|--------|---------------------|---|-----|----------------------------|
| 1 黒暗褐色 | ローム粒子少量             | 5 | 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量           |
| 2 暗褐色  | ロームブロック・炭化粒子微量      | 6 | 褐色  | ローム粒子中量、鹿沼バミスブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック・炭化物・鹿沼バミス微量 | 7 | 褐色  | 鹿沼バミス少量、ロームブロック微量          |
| 4 黒暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量        | 8 | 褐色  | ローム粒子・鹿沼バミス中量              |

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第15図 第5号溝跡実測図

第6号溝跡 (第16・33図)

位置 調査区南東側のB 2 i8～B 2 j7区に位置している。

重複関係 第5号溝跡を掘り込んでいる。

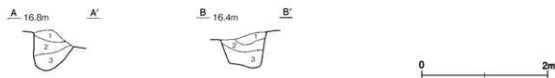
規模と形状 南側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかった。B 2 i8区から南南西方向(N-155°-W)へ直線的に7.36m延び、そこから屈曲して西南西方向(N-100°-W)へ4.84mほど延びている。上幅0.36～0.60m、下幅0.14～0.32m、深さ0.54mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- |       |                     |       |                         |
|-------|---------------------|-------|-------------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子・炭化物少量、鹿沼パミス微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミスブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物・鹿沼パミス微量 |       |                         |

所見 遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第16図 第6号溝跡実測図

第7号溝跡 (第17・33図)

位置 調査区中央部のB 2 c4～B 2 i3区に位置している。

重複関係 第3号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、B 2 c4区から南南西方向(N-161°-W)へ直線的に延びている。確認された長さは10.25mで、上幅0.58～1.03m、下幅0.20～0.63m、深さ0.21mである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

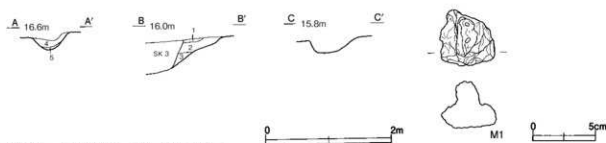
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- |       |              |       |               |
|-------|--------------|-------|---------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子・細粒微量   | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量    | 5 黒褐色 | ローム粒子・砂粒微量    |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・細粒微量 |       |               |

遺物出土状況 土師器片5点(欠)、須恵器片1点(欠)、輪状洋1点が出土している。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第17図 第7号溝跡・出土遺物実測図

第7号溝跡出土遺物観察表（第17図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	陶瓦片	4.5	4.4	3.7	83.3	鉄	表面に赤錆付着，凹凸有り	覆土中	

### 第8号溝跡（第18・33図）

**位置** 調査区北西側のB 2 b2～B 2 e2区に位置している。

**規模と形状** 北側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、B 2 b2区から南東方向（N-130°-E）へ1.24m延び、そこから屈曲して南方向（N-178°-W）へ8.70mほど延びている。上幅0.29～0.94m、下幅0.14～0.58m、深さ0.12mである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

**覆土** 単一層で、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

**遺物出土状況** 縄文土器片1点（鉢類）が出土しているが、いずれも細片であるため図示することはできない。

**所見** 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第18図 第8号溝跡実測図

### 第9号溝跡（第19・33図）

**位置** 調査区北西部のB 1 a0～B 2 e1区に位置している。

**重複関係** 第10号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** B 2 e4区から南南東方向（N-161°-E）へ直線的に延びている。長さは16.84mで、上幅0.52～0.95m、下幅0.32～0.67m、深さ0.17mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 単一層で、堆積状況は不明である。

岡田古墳群

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物・粘土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片2点(鉢類)、土師器片9点(坏3、甕6)、土製品1点(支脚)が出土しているが、いずれも細片であるため図示することはできない。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第19図 第9号溝跡実測図

第10号溝跡 (第20・33図)

位置 調査区北西部のB1a0～B1d7区に位置している。

重複関係 第9号溝跡を掘り込み、第11号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北側及び南側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、B1a0区から南西方向(N-136°-W)へ緩やかに彎曲しながら延びている。確認された長さは8.40mほどで、上幅1.01～1.40m、下幅0.63～1.12m、深さ0.23～0.48mである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

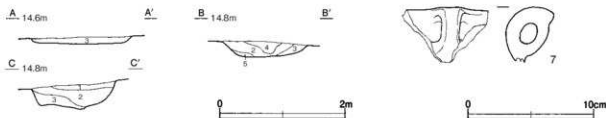
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量  
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
3 横暗褐色 ロームブロック・細礫微量  
4 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量  
5 暗褐色 ローム粒子・砂粒微量

遺物出土状況 土師器片25点(坏2、甕23)、須恵器片17点(坏10、甕1、甕6)、土師質土器片1点(内耳類)、陶器片1点(甕)が出土している。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第20図 第10号溝跡・出土遺物実測図

第10号溝跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師質土器	内耳類	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母に多い黄褐色	普通	普通	1内耳残存。内面から口縁部外面積ナシ。体部外面僅存	覆土中	5%

### 第11号溝跡 (第21・33図)

**位置** 調査区北西側のB1b8～B1f9区に位置している。

**重複関係** 第10号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 西側及び南側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、B1b8区から南東方向(N-49°-E)へ5.00mほど延び、そこから屈曲して南南東方向(N-176°-W)へ10.36mほど延びている。上幅1.10～1.55m、下幅0.87～1.26m、深さ0.15～0.35mである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

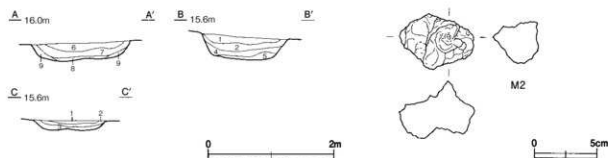
**覆土** 9層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

#### 土層解説

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量  | 6 暗褐色 ローム粒子微量       |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、砂粒微量  | 7 黒褐色 ロームブロック微量     |
| 3 暗褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量  | 8 黒褐色 ローム粒子・繊維微量    |
| 4 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量     | 9 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 5 黒暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |                     |

**遺物出土状況** 弥生土器片1点(密類)、土師器片2点(甕)、須恵器片1点(坏)、鉄滓1点が出土している。

**所見** 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第21図 第11号溝跡・出土遺物実測図

### 第11号溝跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	鉄滓	60	44	45	108.0	鉄	表面は暗赤褐色で凹凸有り	覆土中	

### 第12号溝跡 (第22・33図)

**位置** 調査区中央部南側のB2f2～B2h5区に位置している。

**規模と形状** B2h5区から北西方向(N-60°-W)へ直線的に延びている。確認された長さは11.90mほどで、上幅1.10～1.48m、下幅0.16～0.60m、深さ0.33～0.43mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

#### 土層解説

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 黒暗褐色 ロームブロック少量      |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック微量       |

**遺物出土状況** 須恵器片1点(甕)、不明鉄製品1点が出土している。須恵器片は細片であり、鉄製品は錆化が激しく図示することはできない。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第22図 第12号溝跡実測図

(3) 土坑 (第23図)

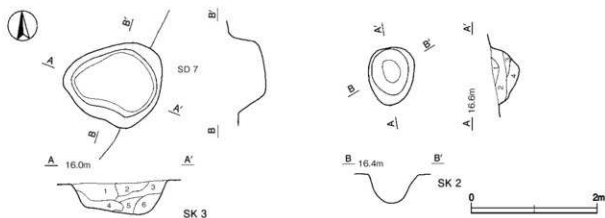
ここでは、時期及び性格が不明な土坑について実測図と一覧表で示し、併せて土層解説を記載する。

第2号土坑土層解説

- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量             | 3 極暗褐色 ロームブロック微量          |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミスブロック微量 |

第3号土坑土層解説

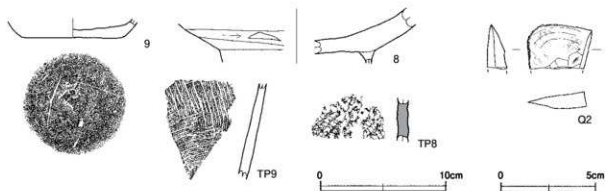
- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物微量       | 4 黒褐色 ロームブロック微量         |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量         | 5 暗褐色 ローム粒子・砂粒微量        |
| 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 |



第23図 土坑実測図

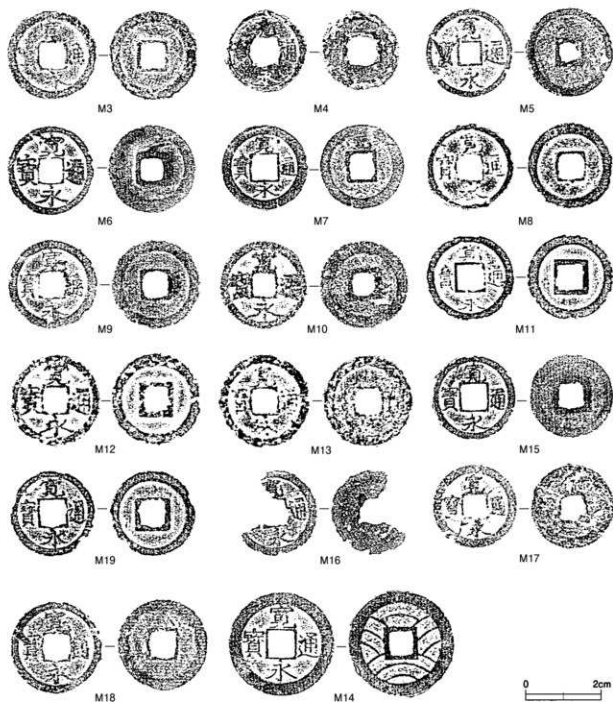
(4) 遺構外出土遺物 (第24・25図)

当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第24図 遺構外出土遺物実測図(1)





第25図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	須恵器	壺	-	(4.2)	-	紫白・右美・ 灰胎土	黄灰	普通	底部回転ヘラ切の残ヘラ削り、高付貼り付け、底部外周に端回転ヘラ削り	B 2区確認	5%
9	須恵器	坏	-	(1.6)	8.0	紫白・右美・ 灰胎土	黄灰	普通	底部回転ヘラ切の残一方向のヘラ削り	B 119区 確認	25%ヘラ書き 「八ヶ」
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP 8	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	紫白・右美・ 灰胎土	橙	普通	単節縄文施文	B 2区確認	前期創業 PL6
TP 9	弥生土器	壺	-	(4.3)	-	紫白・右美・ 灰胎土	にぶい橙	普通	製加支二節（附加2条）による縄	C 3区確認	

岡田古墳群

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	甕器	(24)	3.4	1.1	(8.1)	緑色凝灰岩	自然面の打面。側面に微細な調整痕	C3区確認面	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初跡年	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	寛永通寶	2.35	0.65	2.02	1726	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M 4	寛永通寶	(2.12)	2.35	(1.32)	1726	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M 5	寛永通寶	2.34	0.34	2.38	1741	銅	新寛永、背文 <sup>o</sup>	B 2 9fA 確認面	PL6
M 6	寛永通寶	2.34	0.61	2.02	1636	銅	古寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M 7	寛永通寶	2.26	0.67	1.56	1741	銅	新寛永、背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M 8	寛永通寶	(2.23)	0.64	(1.60)	1737	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M 9	寛永通寶	2.38	0.68	2.08	1726	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M10	寛永通寶	2.37	0.58	2.58	不明	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M11	寛永通寶	2.29	0.23	2.16	1739	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M12	寛永通寶	2.41	0.61	2.64	1859	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M13	寛永通寶	2.39	0.27	2.76	1708	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M14	寛永通寶	2.81	0.49	4.14	1769	銅	西文銭、11枚	B 2 9fA 確認面	PL6
M15	寛永通寶	2.24	0.53	2.76	1708	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M16	寛永通寶	2.24	(0.11)	(1.10)	不明	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	
M17	寛永通寶	2.23	0.14	1.54	1708	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	
M18	寛永通寶	2.42	0.31	1.96	1726	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6
M19	寛永通寶	2.25	0.22	1.94	1708	銅	新寛永、無背文	B 2 9fA 確認面	PL6

表4 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	縦 横			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				確認長 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)					
1	C 3 b1 ~ C 3 c1	N-152°-E	直線状	6.45	0.88~1.62	0.58~1.34	0.7	外傾	平坦	自然	縄文土器・弥生土器・土師器・土製品
3	C 2 a0 ~ C 3 e1	N-44°-E	直線状	7.20	1.40~1.70	0.41~0.91	0.36	外傾	平坦	自然	—
5	B 2 j6 ~ B 2 j8	N-102°-E	直線状	9.32	不明	不明	0.92~1.08	外傾	平坦	自然	—
6	B 2 j8 ~ B 2 j7	N-155°-W N-100°-W	屈曲	7.36	0.36~0.60	0.14~0.32	0.54	外傾	平坦	自然	—
7	B 2 e4 ~ B 2 d3	N-161°-W	直線状	10.25	0.58~1.03	0.20~0.63	0.21	縦斜	平坦	自然	土師器・須恵器・鉄滓
8	B 2 b2 ~ B 2 c2	N-130°-E N-178°-E	屈曲	9.94	0.29~0.94	0.14~0.58	0.12	縦斜	平坦	自然	縄文土器
9	B 1 a0 ~ B 2 e1	N-161°-E	直線状	16.84	0.52~0.95	0.32~0.67	0.17	外傾	平坦	不明	縄文土器・土師器・土製品
10	B 1 a0 ~ B 1 d7	N-136°-E	直線状	8.40	1.01~1.40	0.63~1.12	0.23~0.48	縦斜	平坦	自然	土師器・須恵器・土師器・土製品
11	B 1 b8 ~ B 1 b9	N-49°-E N-156°-W	屈曲	15.36	1.10~1.55	0.87~1.26	0.15~0.35	縦斜	平坦	自然	弥生土器・土師器・須恵器・鉄滓
12	B 2 f2 ~ B 2 h5	N-60°-W	直線状	11.90	1.10~1.48	0.16~0.60	0.33~0.43	外傾	平坦	自然	須恵器・不明鉄製品

表5 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
2	C 3 a1	N-5°-E	楕円形	0.93×0.71	44	縦斜	皿状	人為	—	
3	B 2 d3	N-82°-W	楕円形	1.55×1.36	51	外傾	平坦	人為	—	SD7 → 本跡

## 第4節 まとめ

調査の結果、中世の地下式坑4基、溝跡2条の他に、時期不明の溝跡10条、道路跡1条、土坑2基が確認された。遺物としては、縄文土器片、弥生土器片、土師器、須恵器、土師質土器、陶・磁器、土製品、石製品、鉄滓、古銭などが出土しているが、遺構に伴うと判断した遺物は少ない。ここでは、特徴的な遺物と遺構についてふれ、まとめたい。

第1号溝跡から出土した弥生時代前期の土器（第13図6）は類例が少なく注目すべき資料である。土器は口縁部の小片であるが、平行沈線文と変形工字文が施され、沈線部分には赤彩されていた痕跡を認めることができる。当遺跡での出土はこの一点のみであり、遺構など詳細は不明であるが、県内でも該期の遺物が確認された遺跡が少ない中で、重要である。

第2・4号溝跡から出土した2個体の常滑産大甕（第10図3・4）は、全体の器形がうかがえる優品である。陶器片の大部分は第2号溝跡から出土しているが、第4号溝跡から出土した破片とも接合関係にあった。それぞれの個体は不用になり投棄された状況で出土し、第2・4号溝跡出土の破片が接合したことから、2条の溝は同時期に存在していたと考えた。3の大甕は、口縁縁帯が下方へ著しく伸張し、上方への伸びがそれほどもなく、縁帯が下方へ伸びることで頸部外面と縁帯との間に隙間が生じていることから、8形式期の遺物であると判断した。4の大甕は、口縁縁帯が垂下して頸部に接する特徴を持つことから、9形式期の遺物であると判断した。また、3も4も部位によって二次焼成を受けていることが接合面から確認することができ、投棄以前に火にさらされていたことがうかがえる。また、4の大甕は底部が穿孔され破断面が丁寧に面取りされていることから、貯蔵という本来の目的での使用の後、別の用途に利用されていたことが想定される。

遺構では、4基の地下式坑が集中して確認されているが、それぞれの形態が異なっていることと堅坑の位置が揃わず、軸線もずれていることなどから、同時期に機能していた可能性は低いと考えられる。地下式坑の性格については埋葬施設や倉庫などとする指摘もあるが、いずれの地下式坑からも性格を特定する遺物は出土していない。

当遺跡では、縄文時代から近世までの各時代の土器片が出土していることから、付近にそれらの時期の遺構や集落が存在したことが想定できるが、今回の調査では遺物と時期を共にする具体的な遺構や集落跡を確認することはできなかった。しかし、遺跡北側の山中には墳丘状の高まりが確認でき、周囲には周溝状の窪みが巡っており、古墳である可能性が高いが明確ではない。また、調査区南東側の私有地にも古墳を思わせるような高さ28mほどの高まりがあり、三峰社と稲荷社が祀られている。そのため高まりを古墳と想定し、周溝の有無を確認する調査を進めたが、古墳に直接結びつくような遺構を確認することはできなかった。さらに、その北側にも1.5mほどの低い高まりがあり、2本のトレンチを入れて調査したが、どちらの土層断面も自然堆積であった。

三峰社と稲荷社を祀っている古老から、「祖父の代に農地整備のため削平したことがある」との話を聞くことができた。これが事実ならば、マウンド間にある平坦部での遺構確認面が鹿沼バミス層であることも理解でき、その層が北側の高まりの土層断面下層で確認できた鹿沼バミス層と層位的に差がないことも古老の話を裏付ける事実といえる。これらのことから、削平以前は北側へ緩やかに傾斜した自然地形であったと考えられ、削平により2基の古墳があったかのような誤解を招いたのであろう。

参考文献

- ・ 高島好一ほか「作B道跡—縄文時代後期集落と初期弥生道跡の調査—」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第105冊  
いわき市教育委員会 2004年3月
- ・ 鈴木正博「『荒海式』変遷の背景—常磐弥生式前期への移行に見られる文化系統の断面—」『茨城県考古学協会誌』第16号  
2004年5月
- ・ 中・近世研究班「茨城の常滑Ⅰ～Ⅴ」『研究ノート』5～9号 茨城県教育財団 1996年6月～2000年6月
- ・ 赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学加  
多平島総合研究所 1994年7月

## 第4章 稲荷宮遺跡

### 第1節 遺跡の概要

稲荷宮遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字大戸2199番地の2ほかに所在し、潤沼前川左岸の標高約15～20m前後の中段丘上に位置している。調査面積は1,942㎡で、調査前の現況は畑地である。

今回の調査によって検出された遺構は、中世の地下式坑1基の他に、時期不明の溝跡2条、土坑2基である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）で2箱分が出土した。主な出土遺物は、土師器（坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏）、陶・磁器（壺）、土製品（支脚）などである。

### 第2節 基本層序

調査区西側のB2g4区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は17.0mで、地表から約1.8mほど掘り下げ、第3図のような堆積状況を確認した。テストピット付近は、耕作による攪乱を受けている。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層は、ローム粒子を中量含む明褐色のローム層である。厚さは22～44cmで、粘性は普通であるが、締まりは強い。

第2層は、褐色のローム層である。厚さは34～58cmで、粘性は普通であるが、締まりが強い。

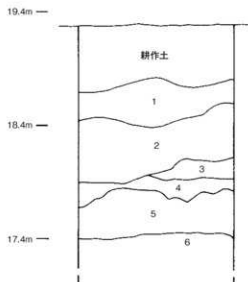
第3層は、にぶい褐色のローム層で、微量ではあるが鹿沼バミスを含んでいる。厚さは最大で18cmで、粘性は普通であるが締まりはやや強い。

第4層は、にぶい橙色のローム層で、鹿沼バミスを少量含んでいる。堆積状況が波うっているが厚さはおおむね4～23cmで、粘性は普通であるが締まりがやや強い。

第5層は、橙色の鹿沼バミス層で、ローム粒子を微量含んでいる。厚さは24～44cmで、粘性は弱く、締まりは普通である。

第6層は、極暗褐色の層で、粘土粒子や粘土ブロックを含むことから常総粘土層の漸移層と考えられ、粘性は強く締まりは普通である。未掘のため層厚は確認できなかった。

高低差があるが、遺構は2層～3層の間で確認されている。



第26図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 中世の遺構

地下式坑1基が確認された。

##### 第1号地下式坑（第27図）

**位置** 調査区南東部のC3c5区に位置している。

**重複関係** 第1号溝に掘り込まれている。

**竪坑** 長径1.14m、短径0.88mの楕円形で、深さは0.43mである。壁はほぼ直立しているが、長軸の壁はやや外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かってスロープ状に緩やかに傾斜しており、主室との間に36cmほどの段差がある。

**主室** 平面形は一边が1.50m前後の方形で、深さは0.76mである。底面は平坦で、壁はわずかに外傾して立ち上がっており、横断面はU字状を呈している。天井部は崩落している。

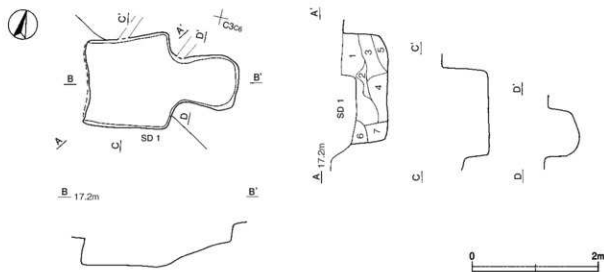
**覆土** 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

##### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6 にぶい褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック微量
3 黒暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 黒色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 土師器片15点（坏2、甕13）、須恵器片3点（坏）が出土しているが、細片のため図示することはできない。

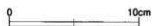
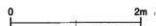
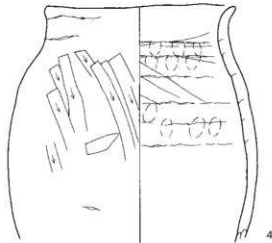
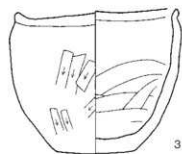
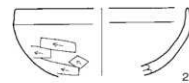
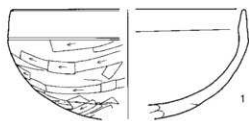
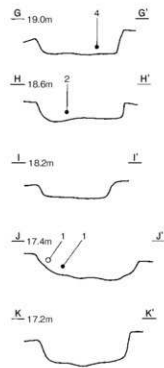
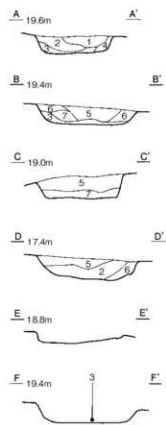
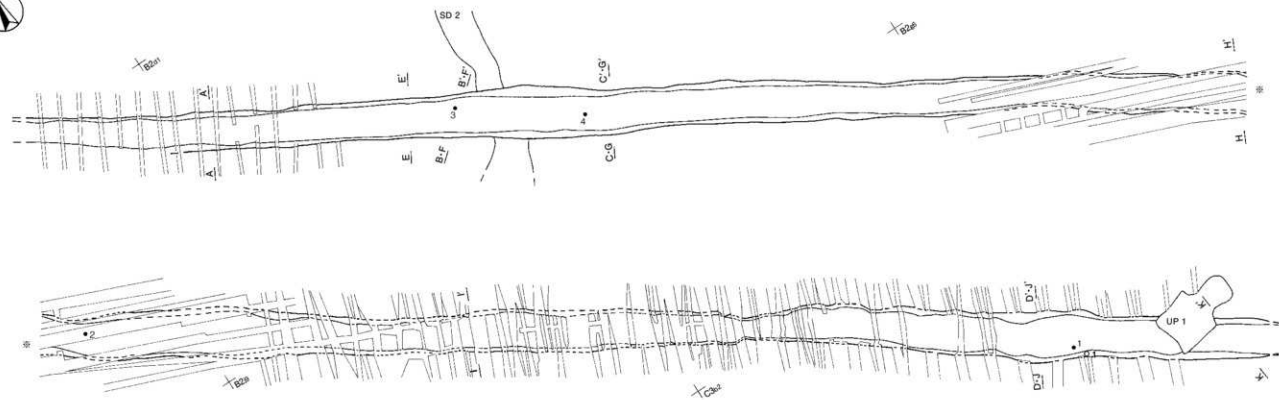
**所見** 遺構に伴う遺物は出土していないが、時期は遺構の形態などから中世と考えられる。性格は不明である。



第27図 第1号地下式坑実測図

#### 2 その他の遺構と遺物

時期及び性格を判断することができなかった溝跡2条、土坑2基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。



第28图 第1号沟跡・出土遺物実測図

## (1) 溝跡

## 第1号溝跡 (第28図)

位置 調査区のB1d9～C3d5区で、東側へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

重複関係 北西側で第2号溝跡を、南東側で第1号地下式坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北西側及び南東側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、B1d9区から南東方向(N-60°-E)へ直線的に延びている。確認された長さは75.20mで、上幅0.65～1.63m、下幅0.44～1.02m、深さ0.16～0.48mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

## 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック微量	5	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量
3	褐色	ロームブロック少量	7	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片79点(坏7、甕72)、須恵器片17点(坏10、高台付坏2、蓋1、甕4)、陶・磁器片14点(碗類10、皿類3、播鉢1)、土製品1点(支脚)が出土している。1は南東側の覆土上層から、2は中央部の覆土中層から、3は北西部の覆土下層から、4は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、中世の第1号地下式坑を掘り込んでいることから中世以降と考えられる。性格は不明である。

## 第1号溝跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[180]	(8.5)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口辺部内・外面積ナデ、体部外面へラ削り、内面ナデ、輪縁みぞ	覆土上層	20%
2	土師器	坏	[132]	(5.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面積ナデ、体部外面へラ削り、内面ナデ	覆土中層	10%
3	土師器	小形甕	123	11.1	5.8	長石・雲母・雲母	濃い黄褐色	普通	口辺部内・外面積ナデ、体部外面へラ削り	覆土下層	80% PL3
4	土師器	甕	14.8	(18.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部内・外面積ナデ、体部外面へラ削り、内面ナデ、輪縁みぞ、指頭痕	覆土中層	60% PL3

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	支脚	(14.9)	(6.0)	(479.0)	粘土(長石・石英・雲母)	ナデ、指頭痕	覆土上層	

## 第2号溝跡 (第29図)

位置 調査区のB2d3～B2f2区で、北側へ緩やかに傾斜した斜面地に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南側が調査区域外へ延びているため全体を確認することはできなかったが、B2f2区から北東方向(N-10°-E)へほぼ直線的に延びている。確認された長さは6.44mで、上幅0.70～1.38m、下幅0.44～0.83m、深さ0.38mである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

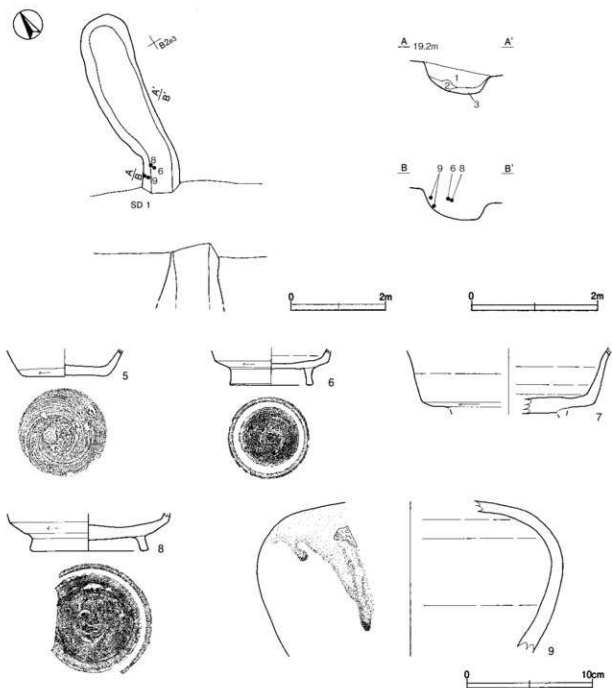
## 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	3	暗褐色	ロームブロック微量
2	明褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量			



遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）、土師器片4点（甕）、須恵器片6点（坏1，高台付坏3，壺1，甕1）が出土している。6・8・9は中央部の覆土中層からそれぞれ出土しているが、後世の流れ込みである。

所見 遺構に伴う遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



第29図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	須恵器	坏	-	(21)	7.0	長石・石英	灰白	良好	底部同軸へラ切り後回転へラ削り、体部下端回転へラ削り	覆土中層	25% PL3
6	須恵器	高台付坏	-	(31)	6.6	長石・石英・ 斜長黒物	灰	良好	底部同軸へラ切り後高台部より付け、体部外面下側回転へラ削り	覆土中層	20% PL3

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	須恵器	高台付坏	-	(5.3)	-	長石・黒色粒子	灰白	良好	裏面回転への切り種回転への刷り、高台部分の付け、体部下層回転への刷り	覆土中	10%
8	須恵器	高台付坏	-	(3.0)	9.3	長石・石英・針状鉱物	黄灰	良好	裏面回転への切り種回転への刷り、高台部分の付け、体部下層回転への刷り	覆土中層	20% PL3
9	須恵器	壺	-	(122)	-	長石・黒色粒子	灰黄褐	良好	ロクロ成形、降灰による自然輪	覆土中層	10%

## (2) 土坑 (第30図)

ここでは、時期及び性格が不明の土坑について実測図と一覧表で示し、併せて土層解説を記載する。

### 第2号土坑土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

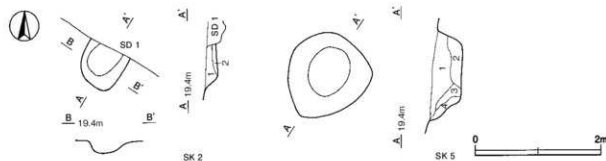
### 第5号土坑土層解説

1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量

3 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

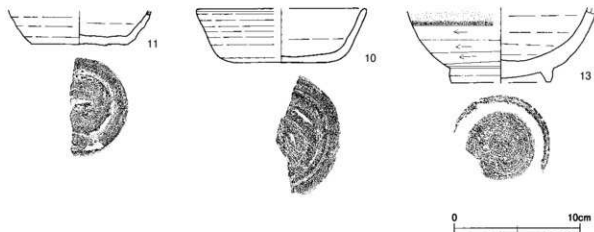
4 褐色 ロームブロック微量



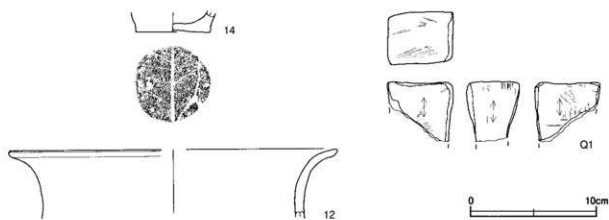
第30図 土坑実測図

## (3) 遺構外出土遺物 (第31・32図)

当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第31図 遺構外出土遺物実測図(1)



第32図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第31・32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	須恵器	坏	[13A]	(4.3)	7.2	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラ削り、体部下端回転ヘラ削り	C3区 確認面	20% PL3
11	須恵器	坏	-	(2.7)	7.6	長石・石英・針状鉱物	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ削り	表土中	25% PL3
12	土師器	甕	[260]	(5.5)	-	長石・石英・葉身・針状鉱物	にぶい褐色	普通	口辺部内・外面面横ナデ	表土中	5%
13	陶器	壺	-	(6.0)	[7.9]	石英・黒色粒子	淡黄褐色	良好	口ワ中成形、削出し高台、体部中位踐輪、体部下端からの高台部削輪	表土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
14	弥生土器	壺	-	(1.5)	6.0	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外面磨成調整不明、底部木葉痕	表土中	5%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(48)	5.2	4.3	(114.0)	凝灰岩	砥面3面	表土中	PL3

表6 溝一覧表

番号	位置	方向	形状	縦 横				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				縦長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)					
1	B1d9~C3d5	N-60°-E	直線状	75.20	0.65~1.63	0.44~1.02	0.16~0.48	外傾	平坦	自然	土師器・須恵器・陶器・磁器・土師器	
2	B2d3~B2d2	N-10°-E	直線状	6.44	0.70~1.38	0.44~0.83	0.38	外傾	平坦	自然	須恵器・土師器・須恵器	

表7 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
2	B2e2	N-35°-E	楕円形	(0.68)×0.70	20	縦斜	平坦	人為	—	—
5	B2f4	N-31°-E	楕円形	1.44×1.29	47	縦斜	平坦	人為	—	—

## 第4節 まとめ

調査の結果、中世の地下式坑1基の他に、時期不明の溝跡2条、土坑2基が確認された。ここでは、特徴的な遺構についてふれ、まとめたい。

地下式坑については「地平面下に堅坑を掘り下げてこれを入口部とし、その底面から横へ掘り上げて本体である地下室を築いた遺構」との指摘<sup>1)</sup>がある。その機能については、再葬を目的とした埋葬施設とする論考や物資の貯蔵・収納施設とする論考があるが、いずれも出土した遺物の違いやその遺構が存在する遺跡が墓域か集落跡かの違いで大きく論が分かれている。当遺跡や隣接する岡田古墳群で確認された地下式坑では、時期や性格を特定する遺物の出土がないため明確ではない。

遺跡内には用水路が遺跡を縦断するように北西から南東方向へ流れており、当遺跡と岡田古墳群の間で直角に屈曲して南西側へ流れている。用水路が造られる以前は小さな小川があったとすることで、岡田古墳群の中央付近から南流していたといわれる。第1号溝跡は、調査区の北西側から南東側にわたって緩やかに傾斜しながら流れていたことが調査結果から分かっており、溝の上流はさらに北西方向の調査区域外へと溯っていたと考えられる。北西側には標高22mほどの平坦部があり、流れはそこから発し、前述の小川へと流れていたことも想定できる。出土遺物は、遺構の北西側から古墳時代の坏や甕及び小形甕が出土しており、南東側では支脚が出土している。いずれの遺物も底面ではなく覆土全体から出土していることや第1号溝跡が第1号地下式坑を掘り込んでいることなどから、出土遺物は遺構に伴わないと判断した。

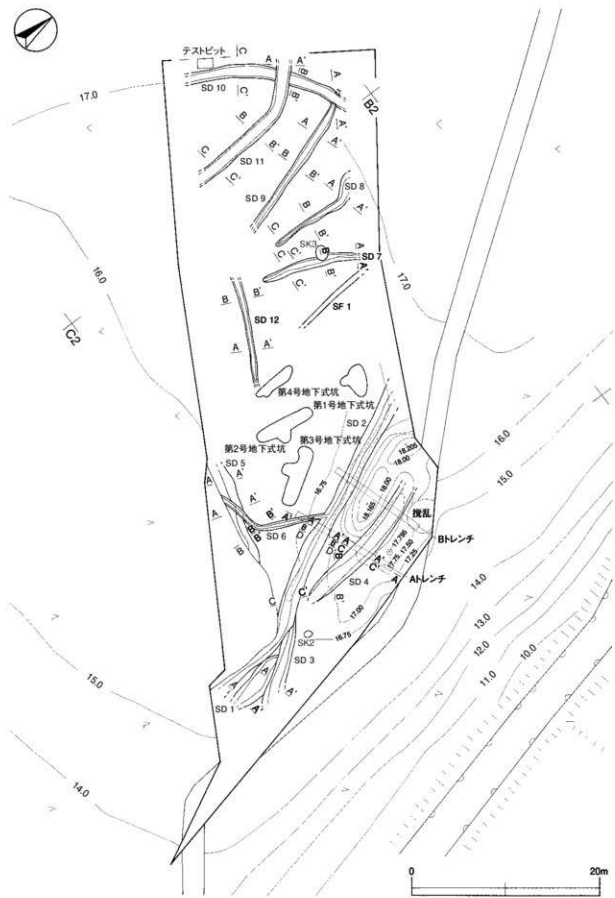
以上、今回の調査からうかがえることを述べてきたが、調査された範囲は遺跡全体から見ればごくわずかであり、住居跡などの集落の様相は確認することはできなかった。しかし、北東側台地上には縄文時代から平安時代まで継続する遺跡群（石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡、宮後遺跡）が所在しており、当遺跡がそれら遺跡群の台地南側縁辺部に位置していることから、調査区を挟んだ北東側や北西側の標高の高い平坦地には集落が存在する可能性が高いと考えられる。また、遺跡の南部には沼沼前川が東流し、その氾濫原である低湿地での稲作が容易に想像でき、この地理的景観から当遺跡付近に集落が存在していた可能性が高い。

註

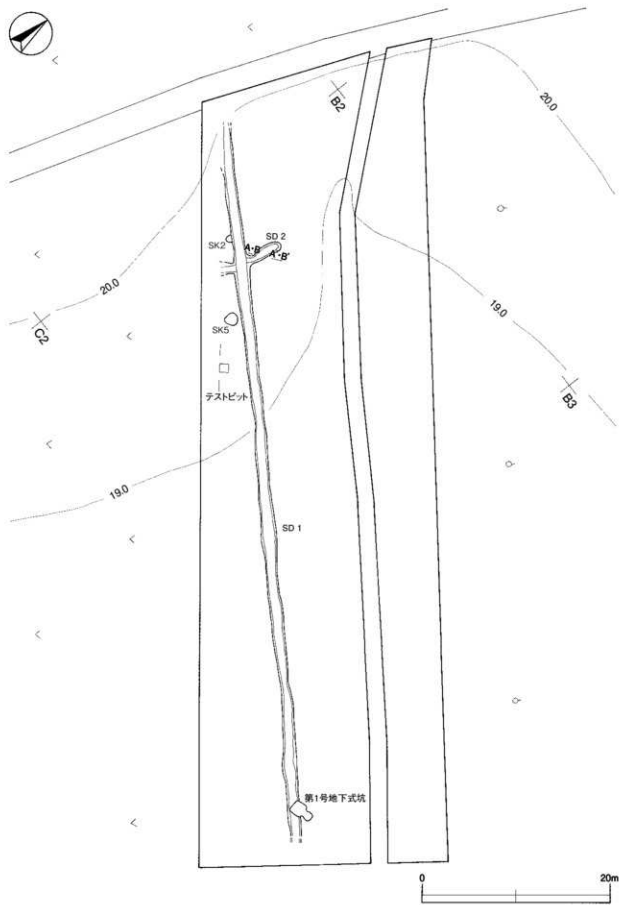
1) 平田堅三「本邦地下式墳の類型学的研究」『伊知波良2』伊知波良刊行会 1979年

参考文献

- ・ 中田英「地下式墳の現状について」『神奈川考古』第2号 神奈川考古同人会 1977年
- ・ 笹生衛「地下式坑の掘られた風景—景観復元から見た中世地下式坑の機能と歴史的意義—」『戦国時代の考古学』高志書院 2003年6月



第33図 岡田古墳群遺構全体図



第34図 稲荷宮遺跡遺構全体図



写 真 図 版

岡田古墳群



遺跡全景







遺構確認状況



遺構終了状況



第2号溝跡  
遺物出土状況

PL 2



第 1 号地下式坑  
完 掘 状 况



第 2 号地下式坑  
完 掘 状 况



第 3 号地下式坑  
完 掘 状 况



第4号地下式坑完掘状況



第1号道路跡完掘状況



第1号溝跡完掘状況



第4号溝跡完掘状況

PL 4



第7号溝跡完掘状況



第10号溝跡完掘状況



第11号溝跡完掘状況

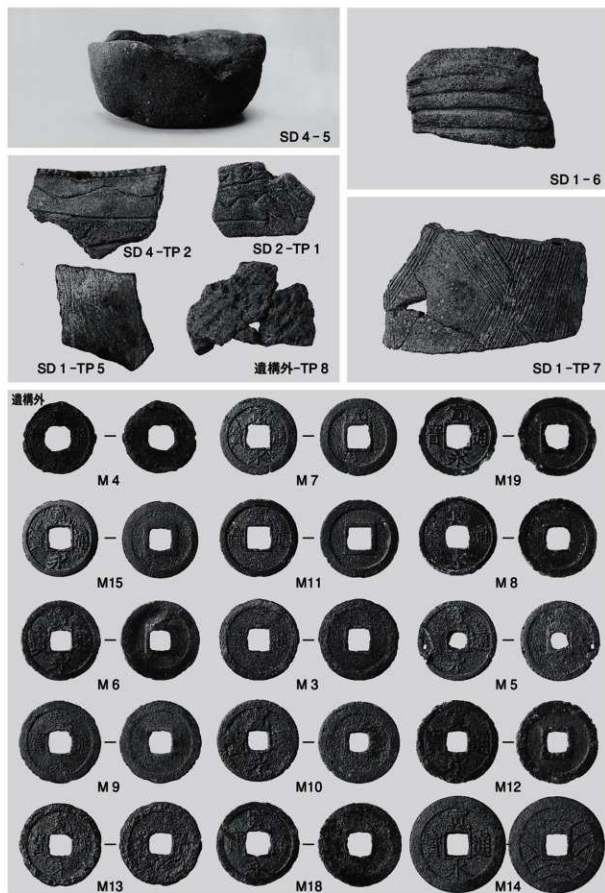


第12号溝跡完掘状況



第2号满出土遺物

PL 6



第1・2・4号, 遺構外

# 写 真 図 版

## 稻荷宮遺跡



遺跡全景







遺構確認状況



遺構終了状況



第1号地下式坑  
完掘状況

PL 2



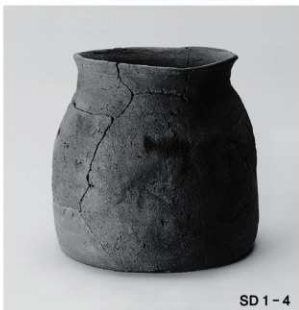
第 1 号地下式坑  
完 掘 状 况



第 1 号 坑 跡  
遺 物 出 土 状 况



第 1 号 坑 跡  
遺 物 出 土 状 况





茨城県教育財団文化財調査報告第238集

岡田古墳群  
稲荷宮遺跡

主要地方道内原墳崎線道路改良工事地内  
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

平成17(2005)年3月22日 印刷

平成17(2005)年3月25日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 あけほ印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

T E L 029-227-5505

